

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	キャリアガイダンス(688)				教科区分	一般教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	梅村 泰成				実務経験内容	
					[梅村]放送業界で制作を経験してきた。培った編集の知識・技術を活かし講義する。	
週授業時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	2	-	-		
科目のねらい・到達目標						
仕事をしていく上で必要となるビジネススキル向上を目的とするとともに、就職活動がスムーズに進めることができるよう、様々な準備を行う。社会人として求められる最低限のコミュニケーション能力と、社会人として持っているべき常識および、ふさわしい行動をとれる能力を身につけていく。						
授業形態	演習	教室	161 教室	補助教員	なし	
就職活動がスムーズに進めることができるよう、様々な準備を行う。社会人として求められる最低限のコミュニケーション能力と、社会人として持っているべき常識およびふさわしい行動をとれる能力を身につけていく。						
教科書教材	仕事力を身に付ける20のステップ					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～3回 就活とコミュニケーションのつながりを理解する 4～6回 意見をつくる力 7～9回 聞く力・話す力 10～12回 自己理解 13～16回 仕事理解</p> <p>【後期】 1～3回 自己PR作成 4～6回 トークセッション 7～9回 就活成功3ヶ条 10～12回 選考基礎（ビジネスマナー、敬語等）、書類選考（ガクチカ作成体験） 13～15回 面接（個人・グループディスカッション） 16回 まとめ</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実に実行させるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>						
--	--	--	--	--	--	--

評価コード	11	
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・100点を満点とし、筆記試験を60点、平常点（出席および受講の状況）を40点の配点とする。 ・通常の授業における演習をもって定期試験に代える場合は、その旨を事前に周知のうえで授業での演習をその都度評価する。 ・成績の評定は、定期試験開始前日までにそれらの平均とする。 	

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	映像リテラシー(A25)				教科区分	専門教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	山田 慎				実務経験内容	
					[山田]ゲーム業界で制作技術を経験してきた。業界で培った知識・技術を活かし講義する。	
週授業時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	2	-	-		
科目のねらい・到達目標						
映像制作における映像リテラシーの基礎を学ぶことで、映像制作の過程において必要な教養を養う。また、社会情勢や世の中の流行を学び、時代の流れに沿った映像表現や映像についてのリテラシーを身につける。						
授業形態	講義	教室	161 教室	補助教員	なし	
映像制作における映像リテラシーの知識を基本的に講義形式で行っていく。必要に応じて課題を提示し、レポートを作成させ、提出させる。						
教科書教材	・はじめて学ぶ映像コミュニケーション 福村出版 長野真一/増本貴士 著 (その他関連資料を適宜配布)					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～2回 演出導入 3～4回 5W2H とは 5～6回 報連相について 7～8回 現場におけるコミュニケーションについて 9～10回 映画における演出方法 11～12回 作品の権利について 13～14回 シチュエーションごとの演出 15～16回 前期まとめ</p> <p>【後期】 1～2回 前期の復習と後期の説明 3～4回 CMの演出方法 5～6回 PV, MV, VP などの違い 7～8回 報道番組の演出方法 9～10回 ドキュメンタリー番組の演出方法 11～12回 バラエティ番組の演出方法 13～14回 ドラマの演出方法 15～16回 後期まとめ</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実にこなせるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>						
---	--	--	--	--	--	--

評価コード

3

評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験（100点満点）の点数を成績の評定とする。筆記試験を80点、平常点（出席および受講の状況）を20点の配点とする。成績の評定は、S（90～100点）、A（80～89点）、B（70～79点）、C（60～69点）、F（60点未満）である。定期試験が受験できなかった及び評定がFの場合、追試験を受験する。 ・追試験（100点満点）の点数は、次の（1）または（2）とする。 <ol style="list-style-type: none"> （1）出席停止となる疾病（医師の診断書のある者）および通院が証明できる病欠、公共交通機関の遅滞による者（証明書のある者）ならびに、公欠が認められた日時に定期試験を受験できなかった場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は、60点を超えた分の点数の10分の6に60点を加えた点数とする。 （2）上述（1）以外の場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は60点とする。 ・前期末試験および後期末試験を実施した場合、各期で確定した点数の平均（1点未満については切り上げ）を成績の評定とする。
------	---

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	コミュニケーション論(A23)				教科区分	専門教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	川崎 慎也				実務経験内容	
					[川崎]長年シナリオライターとして携わってきた経験を活かし、映像制作におけるコミュニケーションの技法を教育する。	
週授業時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	2	-	-		
科目のねらい・到達目標						
コミュニケーションの基礎から応用まで学ぶことで、感情表現を的確に読み解くことや、映像制作の過程において必要なプレゼンテーションなどのスキルを養う。						
授業形態	講義	教室	161 教室	補助教員	なし	
映像制作におけるコミュニケーションの知識を基本的に講義形式で行っていく。必要に応じて課題を提示し、課題を作成していく。プレゼン資料などを最終的に各自で作成させ、提出させる。						
教科書教材	・ はじめての情報メディア コミュニケーションリテラシー 技術評論社 柴岡信一郎著 (その他関連資料を適宜配布)					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～4回 コミュニケーションの基礎 5～10回 コミュニケーションの実践技法 11～16回 プレゼンテーションの基礎・応用</p> <p>【後期】 1～4回 前期の復習 5～10回 コミュニケーションの応用 11～16回 各テーマに基づいた企画書作成</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実にこなせるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>						
--	--	--	--	--	--	--

評価コード	3	
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 定期試験（100点満点）の点数を成績の評定とする。筆記試験を80点、平常点（出席および受講の状況）を20点の配点とする。成績の評定は、S（90～100点）、A（80～89点）、B（70～79点）、C（60～69点）、F（60点未満）である。定期試験が受験できなかった及び評定がFの場合、追試験を受験する。 追試験（100点満点）の点数は、次の（1）または（2）とする。 <ol style="list-style-type: none"> 出席停止となる疾病（医師の診断書のある者）および通院が証明できる病欠、公共交通機関の遅滞等による者（証明書のある者）ならびに、公欠が認められた日時に定期試験を受験できなかった場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は、60点を超えた分の点数の10分の6に60点を加えた点数とする。 上述（1）以外の場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は60点とする。 前期末試験および後期末試験を実施した場合、各期で確定した点数の平均（1点未満については切り上げ）を成績の評定とする。 	

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	映像コンプライアンス(A26)				教科区分	専門教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	山田 慎				実務経験内容	
					[山田] ゲーム業界で制作技術を経験してきた。業界で培った知識・技術を活かし講義する。	
週授業時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	2	-	-		
科目のねらい・到達目標						
映像制作におけるコンプライアンス・各種法令・著作権などの基礎から応用まで学ぶことで、映像制作の過程において必要な教養を養う。						
授業形態	講義	教室	161 教室	補助教員	なし	
映像制作におけるコンプライアンス・著作権の知識を基本的に講義形式で行っていく。必要に応じて課題を提示し、レポートを作成させ、提出させる。						
教科書教材	・はじめて学ぶ 映像コミュニケーション 福村出版 長野真一/増本貴士著 (その他関連資料を適宜配布)					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～2回 演出導入 3～4回 5W2H とは 5～6回 報連相について 7～8回 現場におけるコミュニケーションについて 9～10回 映画における演出方法 11～12回 作品の権利について 13～14回 シチュエーションごとの演出 15～16回 前期まとめ</p> <p>【後期】 1～2回 前期の復習と後期の説明 3～4回 CMの演出方法 5～6回 PV, MV, VP などの違い 7～8回 報道番組の演出方法 9～10回 ドキュメンタリー番組の演出方法 11～12回 バラエティ番組の演出方法 13～14回 ドラマの演出方法 15～16回 後期まとめ</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実にこなせるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>						
---	--	--	--	--	--	--

評価コード	3	
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 定期試験（100点満点）の点数を成績の評定とする。筆記試験を80点、平常点（出席および受講の状況）を20点の配点とする。成績の評定は、S（90～100点）、A（80～89点）、B（70～79点）、C（60～69点）、F（60点未満）である。定期試験が受験できなかった及び評定がFの場合、追試験を受験する。 追試験（100点満点）の点数は、次の（1）または（2）とする。 <ol style="list-style-type: none"> 出席停止となる疾病（医師の診断書のある者）および通院が証明できる病欠、公共交通機関の遅滞による者（証明書のある者）ならびに、公欠が認められた日時に定期試験を受験できなかった場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は、60点を超えた分の点数の10分の6に60点を加えた点数とする。 上述（1）以外の場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は60点とする。 前期末試験および後期末試験を実施した場合、各期で確定した点数の平均（1点未満については切り上げ）を成績の評定とする。 	

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	演出論(910)				教科区分	専門教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	川崎 慎也				実務経験内容	
					[川崎]長年シナリオライターとして携わってきた経験を活かし、映像制作における演出の技法を教育する。	
週授業時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	2	-	-		
科目のねらい・到達目標						
基本的には映像における演出を学ぶが、それは入り口にすぎず、様々なメディア・事象からの演出技法を学ぶ。小さな演出の積み重ねが作品を作り上げていくため、演出技法を学ぶ。						
授業形態	講義	教室	161 教室	補助教員	なし	
授業は講義形式で行う。場合に応じてPCをスクリーンに映し、演出例を提示していく。 また、グループワークなど能動的に授業に参加できる仕組みを展開していく。						
教科書教材	なし					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～2回 前期オリエンテーション 3～4回 演出導入 5～6回 5W2Hとは 7～8回 PV, MV, VPなどの違い 9～10回 バラエティ番組の演出技法 11～12回 ドキュメンタリー番組の演出技法 13～14回 報道番組の演出技法 15～16回 前期まとめ</p> <p>【後期】 1～2回 前期復習と後期オリエンテーション 3～4回 CMの演出技法 5～6回 ドラマの演出方法 7～8回 映画の演出技法① 9～10回 映画の演出技法② 11～12回 映画の演出技法③ 13～14回 「演出」とは何か 15～16回 後期まとめ</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実にこなせるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>						
---	--	--	--	--	--	--

評価コード	3	
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定期試験（100点満点）の点数を成績の評定とする。筆記試験を80点、平常点（出席および受講の状況）を20点の配点とする。成績の評定は、S（90～100点）、A（80～89点）、B（70～79点）、C（60～69点）、F（60点未満）である。定期試験が受験できなかった及び評定がFの場合、追試験を受験する。 ・ 追試験（100点満点）の点数は、次の（1）または（2）とする。 <ol style="list-style-type: none"> （1）出席停止となる疾病（医師の診断書のある者）および通院が証明できる病欠、公共交通機関の遅滞による者（証明書のある者）ならびに、公欠が認められた日時に定期試験を受験できなかった場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は、60点を超えた分の点数の10分の6に60点を加えた点数とする。 （2）上述（1）以外の場合は、60点まではその点数とし、60点を超えた場合は60点とする。 ・ 前期末試験および後期末試験を実施した場合、各期で確定した点数の平均（1点未満については切り上げ）を成績の評定とする。 	

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	映像制作実習 2(A28)				教科区分	専門教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	梅村 泰成、富田 正樹、石黒 誠				実務経験内容	
					[梅村]業界で映像制作を経験してきた。経験で培った知識・技術を活かし教育する [富田]映像業界で制作技術を経験してきた。培った映像関連の知識・技術を活かし講義する。	
週授業 時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	12	-	-		
科目のねらい・到達目標						
映像制作を行うためにはどんな工程で、どのような考えで進めればいいのか、実際に映像制作を行いながら、その方法を学ぶ。特に撮影・編集だけではなく、その前段階にあたる企画・構成にも力を入れていく。						
授業形態	実習	教室	161教室	補助教員	なし	
形態は実習形式で行う。映像制作における制作・技術を実践的に学ぶ。また、グループワークとして映像制作を行い、必要に応じて適宜講義を行っていく。後期の最後に集大成として、映像を制作し発表・講評を行う。						
教科書 教材	貸与ノート型パソコン（授業内で適宜使用）					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～6回 ガイダンス(映像制作について説明) 7～20回 映像制作におけるカメラ応用技術① 21～30回 映像制作におけるカメラ応用技術② 31～40回 映像制作におけるカメラ応用技術③ 41～50回 映像制作における照明応用技術① 51～62回 映像制作における照明応用技術② 63～74回 映像制作における音声・録音応用技術① 75～80回 前期まとめ</p> <p>【後期】 1～6回 前期振り返り、後期について説明 7～20回 撮影実践① 21～30回 撮影実践② 31～40回 中間テスト 41～50回 映像制作① 51～62回 映像制作② 63～74回 映像作品発表・講評 75～80回 まとめ</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実にこなせるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>						
評価コード	13					
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・100点を満点とし、授業時間内における実技技能を60点とし、平常点（出席および受講の状況）を40点の配点にする。 ・すべての実習項目について合格点に達していることとし、合格点に達しなかった者および欠席した者は、追実習願を提出し、認められた者には指定した日時に追実習を行う。 ・実習は、定期試験開始の前日までに終了させる。 					

シラバス（授業計画書）

文化教養専門課程 映像メディア科 2年

科目名	映像編集実習 2(A30)				教科区分	専門教育科目
					必修 / 選択	必修
担当教員	梅村 泰成				実務経験内容	
					[梅村]テレビ番組の編集業務に携わってきた経験を活かし、編集のノウハウを実践的に教育する。	
週授業 時間数	1年次	2年次	3年次	4年次		
	-	8	-	-		
科目のねらい・到達目標						
ノートパソコンを用いて、動画編集ソフト「Premiere Pro」「After Effects」の操作習得を目指す。また、編集技法を用いた映像作品の制作を実践的に行う。						
授業形態	実習	教室	161 教室	補助教員	なし	
ノートパソコンを使用し、ジャンルに合わせた編集のテクニックを基本から応用まで磨いていく。編集ソフトを用いた作品制作も行う。						
教科書 教材	Premiere Pro よくばり入門・After Effects よくばり入門 インプレス 金泉太一 著 貸与ノート型パソコン（授業内で使用）					

授業計画・内容

<p>【前期】 1～4回 前期授業概要説明、映像編集について 5～10回 映像編集ソフトを用いた動画編集技術の応用 11～20回 Adobe Premiere Pro を用いた作品制作① 21～30回 Adobe Premiere Pro を用いた作品制作② 31～34回 BGM・SE を効果的に活用した編集応用実践 35～38回 動画編集実習① 39～42回 動画編集実習② 43～48回 前期まとめ</p> <p>【後期】 1～4回 後期授業概要説明、前期の復習 5～10回 Adobe After Effects について 11～20回 映像編集の基本操作① 21～30回 映像編集の基本操作② 31～34回 Adobe After Effects を用いた作品制作① 35～38回 Adobe After Effects を用いた作品制作② 39～42回 動画編集実習 (Premiere Pro、After Effects) 43～48回 後期まとめ</p> <p><授業外学修時間> 授業内容の理解を深めるため、毎回の授業後に配布資料やノート等を用いて復習を行う。 また、次回授業の範囲について教科書や参考資料を事前に読み、予習しておく。 必要に応じて課題やレポートに取り組み、関連する文献や資料を調査する。 担当教員は、授業外学修時間を確実にこなせるため、振り返りテスト、レポートなどを課すようする。</p>	
評価コード	13

評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ・100点を満点とし、授業時間内における実技技能を60点とし、平常点（出席および受講の状況）を40点の配点にする。 ・すべての実習項目について合格点に達していることとし、合格点に達しなかった者および欠席した者は、追実習願を提出し、認められた者には指定した日時に追実習を行う。 ・実習は、定期試験開始の前日までに終了させる。
------	---